

# 長岡の名花火師に惚(ホ)れこんで

山崎まゆみ(ノンフィクションライター)

2014年10月20日  
NHKラジオ  
明日への言葉

新潟県長岡市出身 世界や日本各地の温泉を訪ねて、多くの著書に纏めてNHKラジオでもその魅力を伝えています。最近では地元長岡で伝説の花火師と呼ばれる、嘉瀬誠次さん取材して「白菊」と言う本を出版しました。白菊は花火の名前です。新潟市とハバロフスクの姉妹都市と成って25周年を迎えるのを記念して、1990年にアムール川花火大会が開かれました。そこで嘉瀬さんがシベリアで散った戦友たちへの鎮魂の意味を込めて打ち上げたのがきっかけで生まれました。その後白菊は12年前から長岡花火大会のスタートを飾る平和への祈りを込めた花火として復活しています。長岡の花火で育った山崎さんは、嘉瀬さんとこの花火周辺での取材を続けて、7月に1冊本にまとめました。山崎さんにとっては「ラハウル温泉遊撃隊」に続いての戦争関連の本と成りました。花火に寄せる思いや、嘉瀬さんたちの取材から感じたことなどを伺います。

温泉イッセイスト 今年で18年温泉に入り続けている。年に半分温泉地にいる。雑誌社から要請があったのですが、両親が子供に恵まれなくて、子宝の湯に通って私が授かったと言う事を幼少のころから聞いていたので、御縁かもしれないと思ってスタートしたのがきっかけです。温泉地数では3000か所以上あるので全ての温泉地には行っていませんが、有名なところは一通り行っています。

混浴をテーマに廻っていたが、こんなに楽しい体験で有れば世界中の人と混浴しようと思って、まずはアジアの各国から始めました。アジア各国の温泉をめぐっていたときに地元の年配の方と一緒にいる機会が何度となくあって、暑い国の私たちが温泉に入る様になったのは、第二次世界大戦中に日本軍がこの温泉に入ったのを見て日本軍が撤退した後に入る様になった、日本人から教えてもらったと各地で聞いた。

日本兵を癒した温泉として、パプアニューギニアのラハウルに温泉があることを知ってラハウルに行ったのがきっかけでした。

ラハウルは激戦地で壕もあるし、戦争の体験を語る人もいる。ダブル湾、ダブル山(日本名 花噴山)がありダブル湾全体が花噴温泉と名づけられた。昭和17年日本軍が作った地図があり、飛行場のあった目の前に在る。日本人と温泉を考えるきっかけにもなり、戦争の体験された方々を聞くライフワークと成るきっかけにもなりました。

「白菊」主人公 嘉瀬さん 小さい時から嘉瀬さんを知っていました。伝説の花火師。92歳8月2,3日開催 100万人の見物客。嘉瀬誠次さんは戦争の体験者、シベリア抑留の経験者。嘉瀬さんは近所の人で、父の友人 趣味の仲間 加瀬さんも私のことを知っています。

長岡の花火を見ると、感情が迫ってくる、切なくなって涙がこぼれおちてしまう。これは一体何なんだろうとの疑問があって、嘉瀬さんに聞いてみようと思ったのがきっかけでした。他にも沢山の声も同様に聞きました。嘉瀬さんは千島列島で闘っていて、松輪島で終戦を迎えて、シベリアに3年抑留された。

「白菊」はシベリアで散った戦友たちへの鎮魂の花火。1989年名古屋で世界デザイン会議があり、嘉瀬さんも花火師(世界的にも有名で世界各地で花火を打ち上げている)としてパネリストと呼ばれて、司会者に嘉瀬さんが、次に世界で花火を上げたい土地はありますかと言われて、シベリアで亡くなった戦友のために、鎮魂の花火を上げたいと言うのがきっかけだったそうです。

嘉瀬さんの思いを何とか遂げてあげたいと周りの人が思って、いろんな方を經由して、NHK新潟放送にも伝わってきた。新潟市とハバロフスク市が姉妹都市の記念すべき年であり、嘉瀬さんの思いを何とか遂げようと、鎮魂の花火を上げることができた。NHK新潟を通じて全国に放送された。旧ソ連の現地のTV局も行政も動いた。嘉瀬さんの言葉がとても胸に沁み渡って、何かお力になりたいと思った。

1990年 アムール川の花火大会を実行されたプロデューサーの大井純さんが「これは大井企画の私の仕事ではなく、男大井の仕事である、何故か、嘉瀬さんの抑留と言う体験の荷を少しでも軽くさせてあげたいと言う気持ちで必死でした。」と言う言葉を聞いて私も記録に残さなくてはと思ったのが、本にする理由でした。

当時、日本もソ連も交流したいと言う時期だったようです。嘉瀬さんは何故シベリアに行きたいと思ったのか？

自分は生きて帰れたけれども、生きて帰れなかった戦友たちにたむけの花火をあげたい、抑留中にお世話になったお婆ちゃんにお礼をしたい、との思いだったように感じます。

抑留中に凄くお腹が減っていて、収容所の近くの民家を訪ねた時にお婆ちゃんからパンを貰ったと言った様な、大切な思い出があるそうで、お礼がしたいと言っていました。抑留中での寒さ、飢え マイナス30℃。昨年2月 追体験しようと思ってハバロフスクに行った。黒パンとスープ 黒パンも1つの黒パンを何分割にして周りの人に分けていた。仕事は港を作る仕事、森林伐採の仕事。朝起きてこない人がいるともう固まっている。(明日は我が身と思つた)

花火玉をソ連に持ち込むのが大変だった。爆弾を持ち込むと認識してしまうので、花火であることを説明する事が大変だった。筒も大砲の様な感じなので、同様に大変だった。昨年2月に行った時に、当時のことを市民に聞いてみたが、あんなに綺麗な花火は見た事が無いと、言っていました。嘉瀬さんのことも覚えていて、尊敬していました。

2002年から「白菊」が復活した。長岡市に1945年8月1日に空襲があり、多くの方が亡くなっているので、その遺霊のため、援護復興の意味で長岡花火大会があり、原点に立ち直ろうと嘉瀬さんの考案で「白菊」が打ち上げられることになる。午後10時30分に空襲が始まったことで、同時刻に「白菊」が打ち上げられる。

心に訴えかけてくる花火だと思います。純白さに苦勞されたと言います。シンプルで凄く綺麗な花火です。思いをはせる時間がある。

日本人が遺骨収集でやって来た時に受け入れをされている女性に取材しました。日本人墓地にお参りに行くが、大半はまだまだ土の中に在りそのままの状態です。

田中さんは、ハバロフスクから内陸に入ったところに住み暮らしながら、土饅頭に眠っている友のために歌を歌う。(田中さんは65歳までは日本に住んでいたが、奥さんが亡くなり移り住む。86歳)戦争を体験された方のしよっているもの大きさを、語られることが多くて、亡くなった戦友の事をしみりと話しますが、しよっていると言う言葉がぴったりすると思います。

世界の温泉を旅する中で、現地のお爺さんお婆さんの話を聞いて興味を持ったのがスタートだったんですが、戦争の事は本当によく覚えていて、多くの方があなたに語っておこう、と言う様な事を口にされた。時を経て語りすることができない方でも、あなたに託してゆくよと言う様な言葉を下さる。

わたし自身も記録としてバトンを受けた、託されたと思う様になり、きちんと私の仕事として、記録として残すのが、話してくれた戦争体験者へのお礼と言う気持ちで執筆しました。

本を読んで、是非私のお爺さんお婆さんの話を聞いていただきたいと言う様な反響を頂きます。

悲しい経験なので、いままで語れなかった、でも語らずに逝く事は出来ない、語るから皆に伝えてくれと訴えかけるようにおっしゃいます。2004年出版 新潟県近隣の紹介の本は書いた事はあるが、キチンと読み物として故郷のことを書いたのは初めてです。

戦争体験の聞き書きもライフワークとしてやっていこうと思つてますが、温泉のことも書きたいと思つている。

身体の弱っている人にこそ温泉に入ってもらいたいと思つています。